東雅　八

東雅巻之十三

穀蔬第十三　　從五位下行筑後守源君美撰

稲　イネ　舊事紀には穀は天神所遺也と

古事記には大宜都比売神の化生せしと見えて

書紀には保食神の化生せしとも見えて

すべて古語にイネといひしは新撰字鏡に

稲は食神の化生せし所にして

東雅巻之十三

穀蔬第十三　　筑後守従五位下源君美撰

稲イ子　古事記に五穀を大宜都比賣神の子飛自是靈神の化生せし所の如くに見えて葦原中國の保食神の化生せし所となして又古事記に大宜都比賣神の須比賣神の化生せし所とも見えしより古語

俗云はゆるし面は頭上に同しうれとは人を
云へると日本に稗といふ始めは天様
田の田と頭しめつゝしより世の人好く
粮食もうまつと作しとしつゝ玉うく浅宮頭
あつまりて見ゆれ稲のこゝ紀も保食神の
腹より生りしこと大宛は此貢如云れ
目より生りしといふ之名称なりとす

云ひ又略していこゑといひしなれと紀に
不祥　古語にイといひし先縁の詞なるかゆゑなる
なるかゆゑといひしはなを精といふかとしも
赤縁なるを殺る云ひしを似なりまいこゑと　便名於上
といひしさイ子之イと云ひことといふ白時縁之
於ちるよ稲穂は子略あるて於を於る子
稲を口セといふ略稲をシクテといふと略せり
口セといふ略口以之也といひ口といふ略縁之
八とは子とといふこゑとして　セとはミ子といふ古語を合

ひとつにみえたるシミといふくシクといひ
シモといふれは色咲のあとシテといひまた
ひ又セといふ皆将源にてことといふ須を
合ハひとつ　右歌は其の湯姫をいといひけれは湯
をかしといふかこと是ハ詞也姫をハことふ
とれともはおなり又其の姫をあくして終りた遊さ
ものうれかるといやしといふをいへといふを姫くやしといふた
詞也といふを子といふかこゝろはさなく古語にいへは
シクといふすかりへきはをきさとうふシクとは源をいふ
色の字頭くへしといひ奥の字頭くシクといふ只はさく記源
ときかすハ迷かなり難きなる此後日さられえシクルといふ

また此世にこれを糕餅なりとよびくすべきは誤れり
とモチといふ之モチとは糯飯之今なるこれか糯米也
搗飯を搗く餅とめしぬる搗餅にはモチといひ又カ
チといふ之カチとは搗飯之義にて餈といひて説文
に稲餅也といひ集韻に飯餅なりといひしよりのち
凡これら糯米麦粉などもて合作せしものは
かれ餻餅あらねば飯餅にて餈の字をば収めれ

併の字読くモチヒといひ数名詞とし見えは
これ代はそ今いふモチヒに似たるものゝ名にてやあ
りん又古へものも今はかはりさまあれと漢字
を緒として嫁より併の字を借用ひて読くそ
チヒといひしかは借名物よき併の字読くそ
チヒといひ又こゝに字義と数るへきなるに数名
をはしさうしと志らへくれ数名にて見ゆへし

ヒツチと云は乾也之義後にヒツチハ再生之刈生ナリ
田にあるをいふともあり 穭稲 草なし 刈たる田の水隣之
ありて此たまりたるをいふ也まづ 糯とは黏稲の米之
饘粥を作るにシロイ子といふハ誤也此ハ実
也白きをいふ也 粳も一名秔ウルシ子といふを
粳やハウルといふハ閏之閏の字読てウルとて
いふかとも此頃之 俗名 稉 又是実也見聞あるを云也

糗は米の麨之モチノヲ子と訓せしはモチとハ
すなはち粘るをいふ也
麨 注にこさといふの義
米の麨也注にみえしごとし

穀

モミ 倭名鈔に穀はモミ 日本紀に訓してタナツ
モミといふを訓せしも義は並に詳 モミとは其はモエ
くモエとは萌く
こは実之も萌芽を発する也 実をいふにタナツモノといふも多
十八種之ツは助辞之モノは物之名也 種といふなるべし 穀字の
もとは五穀といひ六穀といひ八穀九穀なとといひて百
穀といふもまれなれは九穀雑名唯穀といへり我日本
紀には此字を訓してタナツモノとはいひ又訓してモミといふ
ことも紀にみえたり 稲実をいふなるべし 萬葉の併に

籾字釼幾りてミく深き日向玉風ち紀え宝之文
られ之国家不限と之しきことん尺しそう
まう俵名物と糙は米穀新之濱酒物そこ
日子一門よりカナミ子といふ今梅をさまに
排武不須る糙者春稲栽穀の名なりと須
せられはそミ日子とはそこ政穀之日子と牟道之米
穀お熟と其名をひそうカナミ子とはカ千と
播之正子と稲之稲を春まてそ穀を服也

身ハ今俗ニ玄米といふものゝ粒なりとし
十セ穀實但有皮而云米之と傳セしはニヒナ
セ此分成し子十ミといふことを糯實ぬ分
ミをいふ事ゝ称ハ蓄米ふ漬者也證疏ありま
今の七ふ事をいふとを傳セしは也漬ありてありぬ
此をいふ之米ハ皇子穀實之粒を什十ツ七米甲
之糠を又ハ米皮之糟を米麥破之證疏ありま

之ニモ窒也既ニ毇トイフ之日本紀ニハ精ラク
カラトイフカラハ即殻皮之コメサキト云ヘリ
メハヨネハ精純ニシテ實米之サキハ裂之コト
碎裂けしといふ之即徐ニ粉米といふ
ミの足之アラモトハ米ハ未洋漠純粉ニ糲
米ヲニシラケノヨネ精細米之粺米ハシラケ
ヨネ粺米之といふ鳥米一石糲米ハシラク

大宜津比賣部の條に麦を生せしと見えて
をりむきといふ字を蒙二解古語にむきといひしハ
これ萬葉にも万葉集部にみえてうつきし
しひしハこれ芒之毛芒の字をいふ之
ゑるしとは知約めしといふなるべし條名
おもて大麦をはフトムキ一川にてカチカタと
いふ小麦をはコムキ一川にてムキといふと

ほセリフとは良大之カチは稱之カタは硬く
これを稱して硬をいふ之コとはこれ小之
下とは志之古の俗には小麦とまをす麦
とかやしとよんでふう又麦ぬはムキノ名こ
稍是ムキカラ麦末之麸をつムキノカスト小麦
皮屑くとほしきり麦ぬとは大麦をも云
小麦のみならぬあまた穂の熟しきりぬとほり時を

上に玉黴あるものをいふクロミとは是宜之
訛今俗にクロホしといふは是なり凡穀の並
をカウしといふは本の称をカウしといふがごとく
物の稱をカウジといふなり此麹也　麦粉を麩と云
すなはち餅也
みなす麩と麩とをよく水中に揉洗ひくねと
いふ物にあすをフといふは麩字の音なり
漢にてはこれを麩筋といふもし麩をよく
糊とするをマウフといふは小麦の漢にしてもなれ
を小粉といふ是れ並麹のことき
並にカウジといふは称の字なれその附也證之

蕎麦ソハムキ倭名抄ニ蕎麦ソハムキ一阿ニクロムキと
注せりソハとは三稜あるをいふ之稱也
俗凡物の稜あるをいひてソハといふ楓稜木
をソハノキといひ胡瓜をソハウリといふこと也
凡此くさの実の色黒くありしを又クロム
キともいひし今も工匠のことにても木の稜を削去をいひてソハとるといふ此義なり
穬麦カラムキ倭名抄ニ穬麦ハ蘇敬か注カラスムキと

いふは注なりカラスとはクロムといふ語の略
也しかるを実は黒きをいふ也烏鴉をカラス
といふも正に此義也

粟アハ

黍キビ 舊事記に粟黍は保食神の額ゟ生ると
見えし古事記には大宜津比売神の二耳ゟ生し
と見えしアハといひキビといふ義は不詳アハヽ

アツセハトワトハかよはしてくすありと万葉集抄にも見えたりアといふは小之日本紀に刀をわと訓せし也ワといふは丸之古語也物の和名をはくワといふ之古記万葉集には丸の字を読くワといひし也要に云氏小しきみして和名をといふ梁と粟これ綴名之きとは文き作黄之とは宍之ことい

きヒといふ古物は之を実の黄なるをいふ稷と
黍との総名之総名なるを康熙字典崔寔曰
食経曰を引く粟を黍子之アハといふ丹黍
一名文黍一名黄黍アカききヒといふ雅黍一
名黒黍ソロキヒといふ秫を粘粟之キヒノモ
チといふ粱は芭粟アハノウルこ子白粱粟一
名香粱と混してけ後世これはアハといふ

とも一名にして二物之と見てよろし穀
は粟は黍子之といひしハ摂生ニしてアワと
いひしあやまりいひしにはわろし此書に
古はあつくの穀粟の穀あつものと皆称して
百穀といひましこも常より実之為の穀と皆称して
禾といひ穂を粟とて禾之といふいひし之
爾雅翼に古以粟之有浮穀者皆稱粟見て正字通に
黍稷稲粱有苗至実皆同禾とみてし良氏さらしえ

漢土の書に粟といひしものハ我天朝の俗粟の字
を創造りて穀米の穀あるを喚びしものをいふなり
而字義ハ穀の仁田菜と見えし呂是之
今の俗に稲菜とれを日子といふもの也ハ粳秫にして
アハといふものハ彼土にても古の所謂粟
といひしハ漢代より後に到りて始て実の大き
くして毛長き物を粱といひ（今の俗にヲホアハ）といふ者是なり
実細にして毛短きものを粟といひし（今の俗にコアハ）
といふもの後にはまた皆通して粟といふ事
これなり」

洋名はねかはせし　又秫を呼ひくきヒノモチと
下るらし
しひ粱を呼ひくアハノウルシ子といふなるも
いつくわかへモ黍といふそれ稷の粘なる物なり
俗にモチアハといふ毛のなき洋名は李
宗型なり草名にみえたり

豆　一メ齋車紀に保食神の臍尾に豆を生し
とみえし古事記には大宜津比売神の鼻

は小豆をさしく麻は大豆をさゝりと見へたり
テメとは万葉集抄にてとは急之といふ詞之と
見へたりメとは実之ことといひメといふ也
物語之こと実也実の多少を云也倭名
抄には大豆一名菽テメといふ類又後長
豆莢之テメカラといふ花鳥餘情に鵜豆
は業赤豆之といふ也りとてメ阿字豆怒名

眉にも眉毛白毛あるか鶺鴒のことくなれは
かくは名つけらるゝ 蛾眉鳥とも白眼鳥ともいふ
いふ京東の俗名は鵣鳥といふもの之俗名
なりのことは鵤鳥此外にも鳳凰鳥とも載たれ
鴨鳥鷂鳥一種にして二 まて小鳥をアツ
名ありしこと おかしけれ
きといふもアは小之ツキはツムキといふなるへし
古事記に速須佐之男命大蛇の尾をさき
都牟刈之太刀を得給ひしといふも是
なほ同し古来のよしをふして角あれ

さいふ 都牟刈乃太刀の剱也須見えしるまき 角の字誤若ツム之誤ケといふべきといふ説之 倭
名抄に本草を引て赤小豆をアカアツキ
といひ崔禹錫食経を引て白小豆紫小豆
黄小豆皆同種也蘇敬本草注に腐婢は
小豆花也といふをアツキノハナとよめりさは
又緑小豆といふあり今緑豆俗にフンドウとも
ヤエナリともいふものゝ是也 或説ニ又トウツは 粉豆之粉の劔と

らはく豆しさゝといふや是なりとは八穀生之云々
見て穂のかのきみきつゝ摘しへきといふいひ
まゝ角豆一名ハ白角豆サヽケといふ誤也
しはサヽは細小之ケといひきといふハ繊
ありて無角といふ角とはすなはち莢
をいふ也日本紀には荳角読てサヽケといひ
けり今俗にはサヽキといふ　豌豆一名豍豆ノラマメといふ
と混せしはノラとは豌之古称にて豍をノラ

とよみてといひしは詞抄之今俗ニ云トウと
いろは字の書紙もくはしく年色立成
を引く藊豆を籬上豆之アヂマメと
いふと混せしものを今俗にはひくカキ
マメといふカキマメとはまさしく籬豆
之まゝトウマメといふは扁豆之アヂマメ
といふは紀君萬葉集の歌にアヂキヒ
といひしは意得ぬなり

アキてメといふを約めてヒメといふかことく穀の名は
よりて名つけしといひしもあるへけれ或人の説に米は味と
おなしく名つけたるなるへしといへとも穀豆
みえたるもの味はひ備はしとも云へけれ
倭名抄麻類に本草稗を訓く稗を
ヒエ草之似穀者也と順か是記稗之
り書又稗中有米稃取米炊食之不減粟米
といふものの説の倭名も粟稗名を並称す
さらにヒエといふ義も不詳　倭名抄麻類に是の色
ありと見えて莊德らく

ユといひ稗須くヌアエといひ香葉須くイスエといひ
薭須くヒエといふもあり已上の三種並に荏に
よりて名付けし所となりけり荏をエと云ふ事稗
稗比の方言の如くして似たり凡ての俗称にて
小なるものをひくヌカといふも糠に似て小なる
ものとおもひてイヌといふは細なるをいひし稗を
ヌアエといふは荏の如くして葉の細なるをいひし
なり香葉をおもひてイヌエといふも荏に似て小なる
をいひしく或ヒエといふはヨミといふ稗を
此くヒエといふは荏のごとく多く炊食を以ていひ
しなり
なし

已上米穀

蒜ヒル 倭名抄に唐韻を引く蒜はヒル葷菜也

漢語抄に蒜顆をヒルサキといふ今按顆を

小顆之大蒜をオホヒルといひ小蒜をコヒル一名

メヒルといひ獨子蒜をヒトツヒル澤蒜をネヒ

ルといふと注せり日本武尊東のゑそを言

向平和て還上りまし時足柄坂本に至りて

御食す處にて坂神白鹿に化りて来り

ニも明遠し路ひし蒜の行路をすく源本
路ひしまゝも同じ中に見く其数されぬとも
まうく應神天皇の御製にいざあ藝野に
蒜摘に呈し後まひとといふ見てしられたる
古事記古事に
日本紀等に　七九といふ義は不詳古代に七といひ
りは華ごとの実一茎に六七瓣あり華を藏
いふよりをこる秋蒸の渋緑といふの如

くれとは胡地よりきたれる物故とは
説一年ありといへるは蒜を一名山蒜今
俗にノヒルといへる也ノヒルとは地蒜也
ヒルサキといふサキは則読くメヒル
葫シヒルに為しとぞ
葱キ綾名物に葱をキ名葱フエキといふ漢
語物に蒜をアサツキといへるを転
或文字も苑を用ゆる水葱はナキ一

キホウシといひ花をキホウシといひ又葦に
葱花といふ割ありも皆此ものゝことをいふ也

蕤

ツホミウ神武天皇御製の歌に月ゆ中に
ケミウといふもの見えしと日本紀にあり
大蕤をいふもの也と注しける倭名抄に本草
蘇敬注を引て蕤是也和名スホミウと云蕤
はスミウ又薬総名也と注すミウといひ
又薬総名也といふ義並に詳後

ニラといふ物是也　薤韮の和名にニラといひし
はミといひミといふ和名で
いふてゐる万葉集抄にはナニハヤの東歌にナニかといひ
ニラをこうといひこなをこなといふてこしと見て
なり或は後の人梵語によりて書違へるならひ
もあるへけれ梵に尼羅といふを漢に書なし翻せしを

薑

ハジカミ　神武天皇の御歌に垣本に殖し
ハジカミにクチヒヽクとよみたまひしを日本紀釈
およハジカミは薑也　薑をもくは口に銜みぬゆへ
ヒウクヲゑしきれいふと見へたり　倭名

然れは薑椒ともにハジカミといふを証せり
他物の名なるを多く呼ひしは皆是其
辛辣なりし所也薑のことはハジカミとして
故に上世の時に当りしは倭名抄に如く
いひしまゝも今いふまてあやしむへき
倭名抄に蜀椒をナルハジカミ一訓にフサハ
ジカミといひ辛夷をヤマアラキ一訓に

イタチハシカミといひ呉茱萸をカハハシカミと
いふを混せり古ハハシカミといひし物皆
その味辛辣のものといひしハシカミといふ
茱萸も蜀椒辛夷等のものをいひし本の
ことゝきも並に不詳　釈日本紀ニクチヒヽクと云
と釈してヒラクといひし
も今の俗ニ口のヒヽラクともヒリメクなどもいふごとく
辛辣の気味あるといふなりいふハシアムといひし
辛辣といひしなりしやあるらむ或人の説ニハシカミ
ミ皮端赤きをいふ薑も芽も根もの端赤きもの

とらへさくハれいしかとともくよひしもの此是薑よう
ちやしひめくし蜀椒をナルといひしを本草にさう椒
いひかサといひしはこち実おつきりにとあり
はなサンセウといへるの山椒の字ならとよりそ
辛美をヤニアフキといふに翻譯名義 木蘭
辛夷みなといひけるの山谷の辺土生して氣
れ香しさをやいてめしじコフシとは花の初く
開く小児の拳を宛くに似たりといひしと見えて
そり蔓椒をホツキといへるを叢生するとして多チ
ハシカミといへるをタチにて融氣にして辛臭さにて猶
椒見椒それの気ありくて今イヌサンヤウといへ
是も呉茱萸をアハハジカミといへるの類いかゝや物
らんサレのハジカミといひしもの
或は凡の一名としもあるへくや　又倭名鈔に

甚も秘要と聞く山葵をワサヒ漢語抄に
山薑乃字を用ゐ今按するに所出未詳と
見えしとかや或人の説にワサヒといふ物を蔊
菜一名は辣米菜といふものゝことゝいふを
ワサヒといふ義は漢語抄に山薑と見えし
はやてハシカミといふはあやまりなん 蔊菜 みすは
亡友緑水の説にも説あれも
こゝは説なん

蔓菁アヲナ倭名抄に蕪菁一名蔓菁並須

々アヲナといひ蕪菁はクヽタチといふ俗に菘の

字を用ゆ蔓菁根をカブラ毛詩の下體を

蔓菁與蕾之根莖之蔓菁を大芥とし

小者を辛芥といふ辛芥はタカナ辛菜はカ

ラシ俗に芥子の字を用ゆと返せりアヲ

ナとはアヲナは青之ナとは家ゝ純俗の菜

蘇杭と呼ひし絹屋也八年ハつれ茎立之カフ
ウといふ義ぞ洋大已来神の、さ文沈ミ大地
地中ニ入て有し鳴鏑を探り求めて
といふ鏑の紀古の紀等ニ見えて鳴鏑
鏑く鳴をカフラといふ也古語拾遺ニ鳴
鏑をもとメカフラともいひあしく見え鳴る
名をしるくカフラといふなるといふ也メカフ

うとは海藻の根をいふと古説に
カフラといひけりの菰蒋根説のといふは
あられ凡物の下體をいひし　今俗に
菰蒋を
れしカフラといひぬれとも古はあられ菰蒋の
根をも蕾の根説も海藻根の事をもカフ
ラとはいひける倭名抄に穀名を訓くおなじを満と
いひといふもみえたり　御脚をコムラといふもおなし
カフラといふことしカフラといひ名カとはいふ莖説
コムラといふは物説なりけり
こむらとはいふカフラことはいふ子比味辛きを云

気すへくきれ多くして蔓菁は芥属之
李東璧か本草には凡てきすゆゑ倭名
称ま芸薹ヲチと頌せしそれ今十文字と
いふ、ちなみを擂して油とるゆゑその李東璧
本草に油菜といひし是之ヲチと以ゑ八
求洋まゝ天名精はハこタアナ（いまハヘカノ
なと頌せしは芥孫に一名一天蔓菁と呼てと

これ蔓菁菘菜とおなしくて下濕の地に
生ひぬることは名のつく辛芥の類なるかあ
れ

葍

葍おほね 倭名於保祢 葍はおほね 俗用大根字

萊菔 蒠菔 蘆菔 蘿菔 皆葍の通称 温菘なとゝ

おほねといふを漢字にせり 仁徳天皇の御歌にヲ

おほねといふすゝめのみえしとヲおほねは大根なと

日本記にも秋しめとは菜子とは云根をも
ゑぐとはいへり李東璧本草には蘿菔
といへり紫花菘俗呼温菘似蕪菁大根
一名蘆萉今謂之蘿蔔是也菘とは蕪菁名
萊菔とは根名也といひ蘿蔔は後世の訛也
菁といひ菘といふなれど是一物にて候
其根と葉とを唯不同則ぬる也候にや

如のことくを温菘菜菔なとゝ称せん
温菘と呼ひてこおすといひしを見るに文
こと根の類なるへきとおほしく此名行われて
より古きハ今俗に細根大根なといふもの
類なしく見ゆ又和名抄云温菘おほ
へきこおすの菊を和洋萬とうおすといひ
ことはたようかなく
和名須受志ろといふ又ほそね こね根
のおほねをといひし菘見てよりされし温菘を

これをしといひ音蓮力ハこれをしといふなりあきれたるの
根のことをもいひくこれをしといひしなとさうたり
これをしといひしなといひし大の細
かくしるこれを詳かにする成去れ

菫菜すミレ倭名抄ニ和名を引く菫菜ハすミレ
俗謂之菫葵と注せりと委しく詳かに
蘩菫也といふ注に菫葵ハ和名云味甘
爾雅云苦菫古人語倒猶甘草謂之大苦
也とみえしらりさうなれともすミレをスと

いひしを醨と猪を苦酒といふごとし

といひしをこにしの物語みて又は世の滑

稽が楡乃ことくおもはいひしなるべし

因別に董茜粉楡をも見て借雍俞賦

にも烈有椒桂滑有董楡とみえたり

胡荽こにし 俗名附に在為瑞食經をひきて胡

荽をこにし 味辛臭一名香荽魚鳥膾尤

為要と須ちりコミと云は字の意を将

志くよひしるへし今此言絶て二れ

られ物と食ふ充る事は字をしれ

茄子ナスヒ義不詳倭名抄に須なし可はよ

十之文中なりスとは醸之とは実之ミ実

の味浴り物といふなり倭名抄茄子此下

又醃字を附して崔禹錫食経に茄子味

いひしを醸して猪を煮酒しいふとしこし
といひしをこしの特徴みてえ性の滑
浮ゆ故楡乃ごとくなるなひしあるべし
内則に菫荁枌楡とも見えて借庸俞賦
にも烈有椒桂滑有菫楡とみえたり
胡荽コニシ 倭名鈔に在為揚食経を引て胡
荽とコニシ 味辛臭一名香荽魚鳥膾尤

蒿要と得たりここにとは蒿の字の義を将
たくはひしるへし今これを記さんとす
られ物を食ふに充る事は常に
茄子ナスビ義不詳倭名抄に得也と云本
ナスビとは中なりスとは酸之ヒは実之こと実
の味酸なりといへり倭名抄茄子此下
且醶字を附して崔禹錫食経に茄子味

甘醶といへり廣韻に醶は鹹味也と見ゆ鹹
も酸味也俗にヱクシといへり源もり今俗にエグシと
いふも醶味には同しからされと古の時に是を称
醶鹹の味しらせしと見えしより後世の本草家によりて
芋のヱグキ茄子のしつき并に醶をもいひけり日本紀
に中比字鏡にナスといふすゑあるは須也
又龍葵をコナスビといへと後世本草
によりては葉如茄子にて実味酸中有細
子又如茄子なるによりて此名ありし

もと莨菪乃字をはあやまれ防葵を呼ひ
てヤニナスヒといふなることはいまた不詳
今俗に玫瑰をハニナスヒといふ事は陸奥出羽地方の方言
みちのくなれは方俗によりて此名あるへし
芋 イヘツイモ 俗名称に芋はイヘツイモ蕨はイモ
カラ一訓にイモシといふ俗は芋柄字芋茎
ことはりイモといふ義不詳イヘにあるへし
イヘツとまうくるは山芋に對し言へる詞

脚乙 今のこときはイモといふ孫名之根とハヌイモといひ茎ハイモのクキといひ葉をイモノハといひ子をはイモノコといひ魁をはイモカシラといひ茎を乾したるをイモカラといふ也

山芋ヤマツイモ 俗名謂之暑蕷一名山芋ヤマツイモ 俗にはヤマノイモといふ 零餘子はヌカコ暑蕷子之とよめりヌカゴとは言子小しき

なり 俗にぬかごとよむヌカ といふ義ハあまよめり

澤寫 十二井

烏芋クワヰ倭名抄に澤冩一名芝芋十六井と
いふ烏芋はクワ井也水中澤冩のおもと
誤なり十六井といひクワ井といふ義澤なれ
井といふハイモといふ詞の意なるへし二物並に芋の名ありて
倭名抄ことに本草を收載せし民間にてクワヰとハ生えしクワヰハ
瀉くさの莖葉とはなれるに瀉の形に似たるなり
の餅に瀉形といふものを古俗おほへしシモタカの葉の
いふあるなりとしくさなるしかなと　後俗澤冩の字読シモ
ともをはたなりなる
タカといふハ志るへしかれシモタカといふもの八

慈姑草也澤瀉とは異なるものなり古俗ニヲモタカといひしなり

今俗にはシロクワヰといふシロクワヰハ陶弘景がいひし

藉姑生水田中葉有椏状如澤瀉其根黄似芋而小

煑之可啖といふものにてするなり慈姑一名河鳧

茈一名白地栗一名水萍もしは剪刀草箭搭草槎

丫草などいふものなりそれをシロクワヰといふ俗

名クワヰといふもの烏芋彼澤瀉は葧臍なりといひしはクワヰ

といふものは業ニ種ありて對していへるの慈姑之辨

此山白花を開くなり慈姑のごとくにて源蓮也

の花は實をめづるなれは

あるく花をもしらで

百合ユリ 俗名おなじ 本草と同じく百合一名摩

藤ユリと号せり古事記に神武天皇狭井
河の上に幸行して其の河辺
狭河由者於河辺山由理草多在故号佐韋
河山由理之本名云佐韋也と見えたり山由
理といふは百合紅花者名山丹といふもの是
と百合ユリといひしことは日本紀に見えしを
攝りにある康石海等地方のいひし所と見えて

ナリ菟葵純葉不堪食之と須也といへ是
をもて滌料となれるを又淘瀝麁布菜と
訓せる莫一例よる蓋莫漢語抄よウ六ヒ
ユヒといふを須也といはれ今俗よ云へりヒユヒと
いふ是なり

薇蕨ワラヒ倭名抄よ宋雅須と訓して薇蕨二
字を合せ語てワラヒといひ貫流語てウツニて

ワラヒといふを混せり爾雅乃以陳蕃爲李
東璧か本草に擬りに薇と蕨とは
相類して同しからさるものなり然
に薇蕨とのこし倭名鈔に載せたるを
よれは古の時ハ乃蕨をセンマイといふを
我邦乃薇也ワラヒといふ義不詳センマイと
いふの名も亦其不詳ヲニワラヒとしいへは

ゑのワラヒにて太きなりといひしくセン(テイ)
は番語を
草似り ま〻藻色に和草の灰一名
藜灰アカサノハイ陶隠居以て浣衣黄灰
也と頌せりアカサの義不詳 赤色の赤きよりいへる也
とあれども藜灰を見と灰となしてなけをもむく衣
を洗ふ故以て灰け頌くアクといふ(是)アサの義又不詳
蘩蔞ハタヘラ義不詳今俗にハコベといふもの(是)
ハクヘラとは蘩蔞の音に擬せしに似たり

乙ホキ茎は是也一名まる字に丁
とよめり

蒹ナツナ義ニ詳葶藶とまたアシナツナと
いふ是也草者一名狗薺といひて平沢
田野の間に生じて又アシなは
藋葶とは房多くといふて似たり今俗に
又ツナとよべる民狗薺之
葶藶千十俵名物に孟詵食經を引て白葶千

廿漢語抄ニ萵苣ノ字ヲ用ユ今按ルニ
萵字未詳と頃せり墨客揮犀ニ萵菜
は蜀より来りゆへニ名付くといへり
萵苣数種あり又白きものを白苣といひ
葉紫なるを紫苣といひ味苦きを苦苣と
いふ更ニいふ水萵苣あり又今此ヲチ
サといひ又水萵苣をはカハチサといふ

まゐる弍末をいふにや仙覚抄には
山葛とは本も田舎人はいけの本といふ
かりと見てさう千井の前洋なりけれ

蕺

シフキ倭名抄に載て秘要と引て蕺つく
シフキといふは前洋に蕺は味辛しと見えたれ
シフキとはその味しぶきといふにや似たり或人説に
蕺は今俗にドクダミといふ物なりといふ夜不いふは蕺
菜は江南江左人好生食之闕中謂之菹菜と見えて

又小戸縁に生ず葉脘首故俗以為魚脘草なと呼ひ又くさ紫虫のこと記古の時には莱蕗と名つけしと見へて居ルトクダミといふものゝこと也さて其首今時下もいかにも莱の名にもひの香も好のミたまさるゝ故矣帰かくのこと也きりめのトクダミと云ゆ毒よりとく気ゆく似て

蕗

フキ俗名扮ま崔禹錫食経云蕗葉似葵而大廣其莖黄可噉之とありしとはへくきといふ名今俗呼にフキといふ所謂のものなり又本草に款冬一名虎鬚也

ニフキと讀しは今俗にヤニフキといふ
めみしてそこへも大小薊のごとき小薊を
アザミといひ大薊をヤニアザミといふがごとし
爾雅注に黄一名は雞頭菜にツフキと讀
せしを今俗にツニハヌといふ両みして今俗
よミツフキといふ而よはあへ讀しきに本草を引
下悪実一名牛蒡キタキス一州まウてス

きといふ今栴蒡と唐に作るものは非也と注
せしそのきたきすといふ義に詳ウヘシ、
きといふはうまふふきに似て太かるをいふ
る蒡をムヘヒユといふかとし又今俗にコハ
ウといふは牛蒡の字の音をとなへし也 俗に牛の
字とよみて牛字の音をはふく　蒡悪実ともいへは
まは避俗悪也
うまふふきに似たるによりてふきの名なり

といへとも実にはスキの類にあらし今俗
にてツフキヤニフキイハフキなと名付侍るも
つきといへる総名之成といひ山といひ岩と
いふかことさは一物にして種の品あれて
見れのつきといへる皆其中に見あれ
是をおろそ縁あるもの陶弘景かいふ藤蘽
苺縁といひしもみこそやきといひ苺

或説に倭名抄款冬の説に一云や
ヤフキ万葉集ニ云山吹花としるせしハ誤釈なり
しかく棣棠花といふものの和名これ一物也
蕗の字楚辞より出て〻誤釈して香草をさし蕗ハ
蕗草ハ甘草の一名とし高陽食経にも見えしハ
上にしるせしハ誤りて款冬ハ爾雅ニ菟奚ハ顆凍なと
へしと郭璞の注ニ款冬といひ又蹄ともいふと
いふ菟奚虎鬚菟ハ款冬の一名とし廣雅ニ
注ニ葉似葵而大叢生花出根下是也と注し又
此花をもめでしも見ゆ廣雅ニ葉似葵而大といひ
本草衍義ニ春時人ゝ採以代蔬といひしをも陀食經

よみてしかるに今の蕗といふ歎冬といふ字ある物
みなれても陶弘景か説によれは此らの葉ある故に出と見て
それ抄の菜名にもしたるの和名抄の博士をめて
識しおかれしところとみえていかにも倭はれとみきて
いひたるの山路よりきたりそのとやこうきといひしよの
ことさうけやうふかくみちわるくさ倭名抄よみて
しかるにおするもあるせしよれとくよそるの名同しかれと
わかるの物もわさせ或ハ同しき物をさしとも
そうら出してともなきかも詳ならさりし歎冬にて
やこうきといふものにも万葉集に山吹花とも山桃とも
なまありて猶くやこうきといふものとわかち難し
ほとに遂に唐人をとも棣棠歎冬ともあるるとまて
説くとも決しかる
なともみえたる

薊

アザミ　義不詳倭名抄に本草を引て薊アザミ陶隠居曰大小薊葉並多刺といへる大薊ハヤマアザミといふ須せり今俗にノアザミといふ也大薊なり又本草を引て苦芙をカ一二十一川にカミツカミナと須せりカ一十毛は錦失といふ名あのふよれ是カミツカミナは不詳今俗にサハアザミといふはさこれの薊に似て下湿の地に生

めうかいろ

蘘荷メカ倭名抄ニ馬琬食経ヲ引く蘘荷ハ
メカ赤色者為佳と似せられ今メウカといふもの
也て茂ニ祥或人の説ニメカとハ蘘荷の生れ出るを見
といふ説あれとおもふに是も馬琬か食経
ニ赤色を佳としまた本草綱目にも根似薑芽ありと
見えたりメカ是ハ芽の赤きをいふなり古說に赤きを
かとよひしよりハ名ニ
ぞまうしぬ

蓼タテ倭名抄ニ崔禹錫食経陶隠居本草注云

をいふ青蓼ハ多ク人家恒食之又有紫蓼
まくら葒草一名游龍とイヌタテといへる也
是タテ私義云洋イヌタテハ長く似て紫蓼と云之
李東璧本草に按るに葒草のハ大蓼といふ
此條天蓼といふもの之種有り虎不草く生山
谷中作蔓葉似柘花白子如棗許無定形
中瓤似茄子味辛啖之以當薑蓼といふものハ

倭名抄ニ本草云天葵ワタヘヒといふものゝ名分僕
一名ワタヘヒといふ[illegible]也倭名抄に見えしはワタヘヒと
いふものゝ三種本天葵薊菹也ワタヘヒといふ菜並
未詳
葵アフヒアフヒとは日に仰ぐをいふ也其説多葵
葵傾葉向日といふことゝし古の時はこそ
苗葉と茎とをもて常に食ひしと見えたり

一 是猶まことなのしれ

兎葵イ〔ニ〕レイ〔ミ〕は蔵をかけ羊をイ〔ツ〕イモといふ

めし ニレとは滑かなるをいふことなの黄蘗を

か楡めく滑なれはこそ楡をニレともヤニレなと

いひ蕪荑をハニレといふも皆是滑のかたを

いふかれ今俗ドロといひて紙を漉の料とす

一 此滑をとろ黄葵といふも同じことなれ

タケ蕈ハキノこ木茸又木菌也と注せりタケ
此義不詳 注には菌茸のるいをクサヒラタケと云 仮名
抄には菜蔬の字注せりクサヒラといへり
水苔カハナ 仮名抄に鮮魚之流と云く水苔一名
河苔カハナと云と注せり抄には川菜の字を
用ひたり水苔とかひてカハナといふハナは菜蔬
此歌名ともすりかなくてまつ肴を秘要と云く紫
苔ヌムリと云と注せり義不詳 カハナといふ
又古今集の大

東といへるは洋字の義と
たえしに

芹　セリ　義不詳　倭名抄に本草を引く水芹一
名水英セリといふセリをもよくはひしちも
またくるのもに芭胡をノセリといひ一訓にアニア
カナといひ當帰をヤてセリともンホセリとも
ウマセリともいひ蕁麻一訓にハてセリといふ
今俗の俗芹を水芹にあつくこ徳をは
ことさけし　也とかくはひ山とかくはひ浮とかくはひ

蒼薬 蒼也と注せりかハおもていふ義不詳

根似腐骨といふ注ハよれハこの水中よおひて根腐骨
のことくなれハ此名あるよしされハ此也倭名抄よも
水草なれハ又てこ古の時ハ藻蘇とかいて嘲ふ不の也
おくなりたる菖とおもてといひ莇とこおもていひしま
うは此也とかくいひしおくこそ義なりしも是なる
生ては似此ものともは骨蒼也の字なれはとしく

ガハおもていひし
とそいふ

江蒲草 ツクモ 倭名謁ニ弁色立成をひく江浦
草ハ ツクモ 一川ニヌクニモといふ注せり

義未詳古歌にツクモかミと読しハ老
人の髪みだれしをいふかしと見えたれど
その証をしらねハいかゞ似たり

藻

モ　舊事記古事記等ニ水戸神ノ孫櫛八玉神
海布ノ柄を鎌りて作燧臼海蓴ノ柄作燧杵
而鑽出火と見えてまた火々出見尊御歌ニ瀛
津藻といふ見えたりモといふ義は未詳

万葉集杜若花のモリ咲くとはヒシクサを
いゑといふ所モヌはるのまへつの
繁きをいふなり也俗名杜若滿揚り食経
と云り沈者曰藻浮者曰蘋藻ハモ一川もモハと云
蘋を今按するに大薛水之薛也ウキクサと
いふを浮草ハモとは是藻草ウキクサと
浮草くさハ昆布をヒロメともエヒスメとも

いふ海藻をニキメといふ俗用和布字亦然
又滑海藻をアラメといひ俗用荒布字未詳
海藻をカチメと云俗用搗布字を須せりき
メといひしにそといふ説の物をもて漢語抄を
引て海松をこれといふこといふハ海ミノ物
語なりヒロメといふハ広闊を形いふヱビスメとは蝦夷地
方より出るをいふ也俗に昆布と称ひの物なと
いふハヒロメの名なりしをヨロコブの義にかよはしいふハ俗
又和し荒くニキといひアラといふハ古語にて荒妙和妙なる

いひしことよりの皺文の粗細等によりていひしく
ニキメをはまたハカメといひ万葉集には和俗藥研
藥研の字を用ひまたカキとは　まさく倭名抄ハ漢語
摘末し義なといふにや見ゆる
抄にも鹿角菜をいへ又といひしハその
鹿角のことくなる紙といふ義也立成乃云味
菜漢語の鹿尾菜蕪ヨヒスキモといふ義
不詳ヒシキモといふはた漢書に勝かしく鹿尾とは鹿角
又新しく云ふ下に云味ハ　漢語ハ右藻義也立成
鹿尾は義成紀にありて

此御蓴菜ニユモトといふ事ハちおしきなる故也
なるへし漢語抄乃水雲モツクといふ義又ハ岸
江浦草ツクモといふ延喜式の莫鳴菜はナヽリソ漢
いふこゝろなるも
語抄には神馬藻に作るもナノリソといふ按本
又未詳但神馬藻諸ハ多くと訓しなのりそ海藻
ナリソといふハ合する所をとりて後なりとの
かしは丸もナヽリソと製するの意へし万葉集ハ

鈍は名なりまたとこしへとも云ナリツ 壒嚢抄の説く下条
とナリツといひあしきのくといふ
葉えへし或ハ如何花 英絹花 名 奈 草花名
紫藤 如何 藻等の字なり
海蘿フノリ 俗名 海蘿 湯 食にて引く海
蘿ハ性滑也 フノリといふ 俗用 布 若 字に作
せりみと 糊といふ ハ滑にして 物を
粘さすへき 麩 糊のしるしなりとに 麩糊と つとふ

古小差の名得え見えず 海苔此れ亦呼ひくノリといふハらる
滑らかにして滸薹はアヲノリ俗用青苔字紫
菜はムラサキノリ俗用紫苔字神仙菜は漢
語抄にはヤマノリといひ俗用甘苔字雞冠菜ハ
漢語抄にはトリサカノリといひ式文用鳥坂苔字
延喜式に於期菜とみえしはシコノリといふ
滑せうシコノリの義不詳

御髪イキス候名物は雀尚揚合候を以て御髪
にも是非以而乱髪イキスと以て右歌式の凝湖
藻ハコルモ八候は用心古字コ、ロフトと以て漢
語物は候イキスは小凝茶コルモハ候大凝茶と
以て候セリイキス嫁事祥コルモハ候民凝
御藻之コ、ロフトを候コ、ロは凝之フトは大之民
大凝茶也今にも候ハ凝を以ひくコルハ与し云之

俗名かはよもぎといへり　茉蕗は水際の間に生けり
ものにて花を秋さく頃に茉蕗は有
稀にて右の古圖のものと見える事は経
此頃茉ヲホトチ前蒿ヲホヒ芹蓆ジアトニキ莇
蒿ヲハキれとはいふことにて花を岸菊蘿コミヤ
ク男皇荒ク、サのことも記は　漢語抄よ一云葉蔵草　とえられけらいカホクサ
とや後　並よいて宇古多なる成将して時ぞく　今俗のら　茉蕗く
らん

光りある内のことき胡蘿蔔ニンジンといふもこれも根人参に似たれはなりといふ茼蒿シユンギクといふは春菊にて花春開きて菊花に似たるゆゑ菠薐草はうれん草といふも漢名の菠こそうを略せし郝児佛ヨスナといふは古渡物のみこさあるの紙よりひくヒメといひしかことくなるへし○世に五辛といふものも活用しられ念義経には大蒜茖葱興蕖を以て五辛とし経にはニラヒルコヒルラキアサツキリンにらといふ興渠といふものの不詳なるゆゑにさまさまといふ義解に入れ西域梵語ならんと阿魏なりといふも興渠の字すなはち衆書いみへありといひつきしあれまゝかくなほちゆうをもよくりたるとひ倭用の字はいのちなりといひはさしこうはクレノオモといひつるなれ倭名抄に草若乾燥りく懐香一名懐芸和名クレノオモといひしもあるを転よへくもあるへしといふへし倭用いしものゝ字の

ちしては蘭葱まさいつかりのちやあるべき捨芹なれ
或說ニ葱韮薤大蒜小蒜といふてみえつ○まさ七種菜と
いふものとも說同じうれどもるべきものゝ中ふなの才見てし
りや我いまだ見ざれもるし捨芥ねらは蒔蘿蔓菁芹菁
此那說に之呂佛座ときるさるゝナツナハリヘラセリスヽナコキ
ヤウスヽシロホトケノザといふ蒔蘿蔓菁れとさは鄙くへ
つれ薺繁ゝスヽナといふさも捧洋なり狩と薺此字を
用ひらましはは蔓菁のなといへしもうるし此那說に
之呂佛座のことは或人れ說くコキヤウハ文法定疏なりて
し母子菜氏萵麹と酒ゝ之呂は菜菔之佛座れ土家菜と
も田平子ともいふものは臭蒿ことといつくハカリサといふものとよひ
てコキヤウといひしすこち微と主へきものとといまた見は塩
囊ねまは五行と去らしさうくる薗萸こてあれスヘリヒユといふ
もの傳名ねまは一名五行菜こ見てこう鄙ふへくもあられ菜菔

それよりシホヲともス須ナなともいひしすハえてしれとス
ヽしロといひしすは是もいまさら微とすへきものと見えス
ヽしロをはアサミとやいふめる也倭名抄ニ小児が髪ニ附とスヽしロ
といふと見えたり本草衍義ニよれハ薊ハ其似髪といふ
ものゝ花髪のことくなれハ名付りと見えたりアサミ
ハ花の小児がスヽしロの如くなりけれハ俗ニみつくるなるへし
しかるを仏座といふもの真実あらさるをは是一ツニ
田平子といふものといふ事も是ハうけられす壒嚢抄ニ
を仏座田平子となつくるも說二ツ有へからし

己上菜蔬

東雅巻之十四

杲蓏第十四　　筑後守従五位下源君美撰

杲 コノミ

蓏 ソサクタモノ　舊事紀に素戔烏神謀叶遂られし新羅国をさりて出雲国に出られし時其児五十猛神天降りし時多く八十稜威嚇へさ樹種をとりて韓地には殖ずして尽に持帰りて

筑紫より始て大八洲此中に播殖されけれは
此さては皆切て此しきとそ見えたるを略へき
樹種といふものハ民屋ニことに呼ひし所也
抑又日本紀ニも素戔烏尊大蛇を斬給ひし
時衆菓をもて酒醸しめられしとも見えたりコノ
こゝは木實の儀見て說文漢書等を引く木
上曰果地上曰蓏また有核曰菓無核曰蓏

又木実曰菓草実曰蓏果之日本紀私記云

コノミと云倭名ハクタモノと云蓏をクサクタモ

ノと云之を誤りて後の倭クタモノといひしハ

凡樹穂抽して云流の將也ける多く又周りて

草実をハクサクタモノともいひし也依て今雖蓏

觔切数等を引て核者子中の骨之サ子と

云又桃李一名之人醫家書ニ云桃人

唐人等是をもちりさけは小之子て依根之

桃

桃は、伊弉諾神黄泉軍のために追れ黄泉
平坂のもとにあり給ひし時に坂本なる桃
樹の実三箇をとりて待撃給
ひしかば追来るもの悉く逃去りぬその御
まいりせしかば桃を褒給ひ名を賜く意富加
牟豆美命と名つけられきこれ桃をいふ

冤を遁るの縁として借する事なりと見へ
きりこを錫ひしかの名言写とは太之迦年
前陳之至しは謂ゆる実とは実之ことを仰ぬ大
かるうは俗磨なひし所とみえもことい義
此ことさは不詳されと太しいふを傳る多といふ
ほう言写といふとなくこそえまかりけりめられ
古よまいこを実の解きまのあるといふて似たり

古語に凡物の名を桃にはもゝといひけり
されはこれ百也千也これ多也漢人の説にも桃字
木に従ひ兆に従ふは桃は蕃殖る子繁十億曰
兆言其多也なりと見えたり又日本紀有金桃
といふは見てえだしてはなはたれもの名
いまだ聞こえず述異記に見ゆ倭名抄に弁色立成を
引て李桃をツハキモヽと注せりツハキとは

樹名あつく日本紀には名桃とかきつれ
もものことにも樹の実は此桃に似たれとも
くさいひし漢名にてもちゝす此李のことくして
是ありとく沙と浄うつるとくにぬる李桃ある又
は是桃とも油桃ともいふとみえて候せいハ
イモヽとは是ツハイキとは桜の桃しるし
倭名抄に桃人一名桃奴モノサネ桃脂一名桃膠モヽノヤニといひ
加えんことりやにとはやはらかことは秋ありをいふことも桃ある

す一あきと
いふなり

李ハ木子は破之子とは桃之子字破して
多きといふ之倭名於て麦李は麦秋に熟る
故に名之漢語於てサモヽといふ蒙名苑ニ
李ハ五月熟李之といふハ是之と須しける
サといふハすもゝ之こと熟するすはき之一方果
桑於て古語ニすをといひくサといふなるへし

しハ昔をサチモといふ
ものなり

杏アンズ、凡て草木の名にカラをもくはふるの
はるか[illegible]韓地より來りしと見えし物を
を似く非なるものを呼ひてカラといふなり
よりて漢人の胡をもて指す名に通して似たり
と見えしあり今俗にアニスといふを漢名を
て杏子の字をもちひし

楊梅やまもゝ倭名抄に爾雅注を引て楊梅をや
まもゝ状如苺子赤色味甜酸可食し同七巻
食経を引て山楊桃有二種黒楊子名上同
味甜美可食とありやまもゝは樹山谷
にありてしげく実又繁きをしげく如くいひしと
見えたり
やまもゝといふものゝし桃名杏李名にみえし
らし もゝは山の桃に似たりあられたり
ともゝをしげくよみすは凡果の名の因核をつゝく核中に
仁あるものを皆もゝとはいひし 爾雅ニ桃子 現桂と

ゑりこそ古の俗なと名つけしも此皆なるを
かそせしとみえたり
さ譯まりしさしひとえたる爾雅注あることさは
漢は以下所見楊梅あして世にやまもゝといふなる
なるを疑ふへきは七巻食経をとりしるし足
桜子とも名よ同しといへるを記は紫なさ
に阿りしよしは後によむは漢にて
山桜桃といふものは山桃の字の見えあれて

此わくに実ある果をいふのとよりひくやニ
モニといへとも名は同しけれとしことなれは異
なる也又倭名抄果部に樹実を載せて偕に
アウシテといへ一例ニウクヒスノキノモといへる按に
ならは本文詳にしるしゝ本部に和名を例
て桜桃一名朱桜ハヽカ一例ニハサクラといへと
流しけり漢人の強て按するに桜桃の実源

紅なるを朱桜といひて朱桜ハ雅字之
山桜桃ハ桜桃の外にて、も定ほ異なる
花もの、山なるよしぬきえかくはかりいひ
しこれを伊勢の名ハ同しからず稀にも
物ハ異なれハ或ハ名同しからぬをも
うたゝ志るし或ハ名異なれハ同物をと
かゝくこりしことおもひされハ後の難あ

称し秘書の語よりウメといひけりといへく
ウといふ語をもくはひそのま唐山二ツ之
万葉集之鳥梅字を借てウメといひしを
漢書を借りて志乃せし之鳥梅ハもとこれ
本梅を採りて製りなせし薬名之これを漢
書を採りて此方にもこれを梅のウメといふ
よく知れしこと書を借用ひしなり之鳥梅也

是みして二種之といふ也檎を假名附よりウコウ
といふ字義をふまりくよりいひしものよしハ柰
をよひくりこきこといふ林檎をよひくりコト
いふなよこれふも名を略してよぶ也りことこといひしなり
ウコウの略まくれ是林檎の字音の略なり

梨 ナシ 前不詳假名附ニ檎をやてナシ山梨之
を誤りしハやニナシニは山梨の字訓をまく

柹

赤実果之鹿心柹也ヤマカキ　柹ニ小而長し

ほそりかきの義ニ澤つかき成よし御ニ家を須

し候紅色れしかき是ハ赤ミ柹之しゐ

つしやこかき是ハ山柹之橘もと山梨といふもの

くわうく

橘

久千八十古事記ニ允恭天皇の御世氏あるニ宛

連賀し祖名ヲ多遅麿理をと世ニ出る

て釜波士歌能迦抜那木實をもとめて木實
を採ては年を經て還りしに天皇崩
しまひたりけれは四角をは皇居に詣し四
實を御陵に詣りやく叫哭して死しける木
實を今橘といへるこのことなりと日本紀には
さる人此花を田道間守とよみ又非時香菓
字成月の總てトキじクノカクノとはよむなり

里老の賞世話にいひしとの孑洋注に橘とタ
千八十といひし事にも洋斎子紀日本紀姓氏
録に橘をも虎杖花とも古の時には多遅花と
いひけりさらに又千八十といひしもの一名にして二
ありけるとし　虎杖のりありなるへし　倭名抄にも又千八十
といひ又和名をしく橘皮をも又千八十人カハ一
名にたきカハといふこそ実当る物の名之とは也

とい不句の記もりくとしひ一須之及アヘタチ
かちとはかろくといて此ふ左りく候しカラタ
千此一念足なしといふも一定此須わりともみえ候
西須白雁以の須とみえてかこも須此甘くして本幸かくよろ
きりをいひて似たりさあとしていふへきいひつさしとと
なえたとしもしまくけれ今蓄玉餘といふけれと蓄とる
せしをいふ人の物ともき色雪落脂橙齏ニ及見えたり
膝須を紐莧の須とみえてかこも須は說出を引く七巻食経
また似柚而小といひ秋冬には似橘而大といふ郭知言は莫
皮黄皺といひ情地志には春夏秋冬或花或実といひ淮南
子云橘樹至江北化為橙ともみえたり此顆危柑は

らも漢に枸櫞といふものは
日本にて種子とはいふ

柚 ユ 倭名抄に柚一名は櫾似橙而酢並にユとい
ふも棱椵も柚属漢俗に柚柑といふ
ほかりユとは柚の字の音成をまく呼ひたり
棱椵二字をとり合てユカニといふはあしは
本邦にては棱一名を椵といふも柚属にし
てそのたき盃のことく皮厚サ二三寸中は松

子は似て食ふは味あしと見えたり漢語には
ユカミといふは柚と柑との二例を兼ねしもの
とあり古語には佳果とみえしと見えて
めでて民の三五といふものを味経こともなく
これも先生榆のいひしとく中すしを出あていまさ
柚といへるものと見えたり柚といへるものを紅白の二種を
て蕃の上にひきてなりにあつくてそれしても
肉をあつくといひくこそ形と為して見えしてそれも見え
よりきたるの果せしてこそを額恭におもて蕃柑と
といひしものは同しきにて柚といへるものの

まさしきのことにありのまゝなるを蒂のあたり大き
なりたるはみなたゞならずあられまじく必ず実のうちにくらみへし
ともなりぬれどもさきざき黄葉に成果の形待て来り
皆壁中の柑をも括くたふの為に半を用ひしと解
これよりはかれ是を得たるはたえ倫もいふのこされ形こそ
ありはたきなるしてぞ見まき紅きうるこ味の甘きさまもされ
はこ見えうりとし着へきうちあり海の為に寄て漁樵き
為かしうとけて出ることて謂ひきこゝにあることはされ
とけまの大くとゆく柑とありけるとはいふなれけ後を波
松なれ人とたいへし〇凡草木の花実をも必ずよ
ありく形名の同しくてさとの里はれ是なんこれが中橘
柚のたとへも性の変じやうさまのことを見て橘柚
淮而自変為枳ことはりすまあるくこそ根を移し
こちにも独りの見てあれば新枝をとゆくは樹にも

ぬすと弁しけれひのれ世をのはかりごとを人にまかせつゝ
はさみたる語くその語を書きたれ

榛子

ハシハミ 倭名抄に介絶をはしばみ 榛をハシハミ 榛栗
とし語せり一方兆の栄に榛字をハリとよみたるは
語也とあり又小木を呼ひてハリといふ古
語にハシハミといひしを略ハリといふ之榛樹也傳く
おしきみて義をしめすといひし之ハシハミと
はしハミ実をいふ 日本紀に榛語くハリといひ 倭名抄に赤語くハシハミといふ

クりといふ是といへしれ古き説といへとも
蚌蛤をはまくりといふもこ海濱に有ものゝ名
なれはくりといひし栗をクりといふもこれ也
の自裂て実墜ち地に落ものなれはくる
とやいひぬらむさて花をは古名はくといひし
又とは菓之名菓なるくるをいふ也毬栗
栗刺俗云クリノイカといふもこゝにあり殻肉也

腰とは後名掛りにお等くと謂ふ栗拔をクリノミ
ノ木搦手よりも建溝の如くと謂しき故事
一名鷹栗栗に於ける細小者サクリと云ふを
謂しよりサとは古の細きをと云ふ　イカと云ふ　イは発語
詞にカとはきといひケともいふ此の時セしに尖鋭の如く
云ふとといふを木溝にクリノミフカハしといふこれ之を色め
目の開かぬるを工云といふた女又の口を開きて笑ひ
かたくなるといふ之後名掛には鐔鍔の字譌て工云
とありぬ

枇子 乙亡 麻事古事日本紀等に神武天皇東征
之初遂 吸門にありのひ 因て土神珍彦
に遇のひ 枇楫の末をさし渡して御船に引
入とさうけ 名を賜りて 椎根津彦と
名づけ給ひしと見えたれど 乙亡といふ義を
不詳 倭名抄にも 和名をのみ 椎字乙亡と以ひ
然りと乙亡 乙亡是は下にしたる字は 富之を實自隣て

樹乃よあつといふに似たり古語に菜根と
いひ根をしろみといひしも此節之日本紀
万葉集等に木の字を読てこくしといひあり
或人の説に根をことといふ字音を轉して呼ひし之
と云我邦用ゆるに漢字の音を轉して此樹の名と
三井といひてしるしも
おのかをしれを

櫟　イチヒ

柿　ト、ナ、倭名抄果蓏類に崔禹錫食經云雅說

とすく椴子はイチヒ相似而大於杼字者也

椴椋はイチヒノカサ果し自裏者也とはし

深色にあして夜話とすく椽はイツルハミ椴実之

といふさうさして椽椴あてこれ一物あして

さ実れてされはイ、チヒとさ又いつれハミとさいよ

二名あるしたるカサ果はさ形の笠て似

たるといふ文　果蓏類　宗雅注とすく

栩一名杼字與芧同トチといふ荘子狙公賦
芧といへるもこれなり毛詩陸機が疏唐風
此是栩をいふなり栩櫟也徐州人謂櫟為杼或謂
之為栩其子為皁或言皁斗其殻為汁可以染
皁今京洛及河内言杼汁謂櫟為杼五方通
語也といひならはすに櫟といひ杼といふもこれ
一物也倭名抄に見へし所此ことに及櫟と杼と

とあらかしても名も侍る異なりて此疑し
くれさるは陸機の秦風苞櫟の疏に
は秦人謂柞櫟為櫟河内人謂木蓼為
櫟椒榝の属也其子房生為梂木蓼子亦
房生とみえしかは彼此にても柞櫟といひ木
蓼といふものゝ又ひとしく櫟といひ又子も又
其子房生しけれはこそ名も同しけれ

或人の説に椰をハツ之とよむ事僻名抄にハ漢語抄を
りて枕亦讀くハツしといへて云漢語抄の字を記
又椰を枕樓之といふものすをひしと枕にありしーめ
あり洋なるかハわかれ

椽 榱 椰 椰 栺 一物也 すしよ說しありて也杯

そとひ云方云ふれなるありとおほしく

て同しつね所ありぬきて此こそ君もおのく

おきなるなきさてん此わして今二十七と

ひつれ、こしかひ小千とよみてらさも

右の假名といひしかともあるへくもあらされ
ことさらはこと家隠れぬみをせしりける
爲よ假名イチヰといひく赤果かろ本
を用ひ寫名を假のホトチといひく斑文あり
本を用ゐて倭名樹よ鹿額を州
て標を本可爲當也漢流樹てサクくきと
いふとえてくイチヒノ本くしはえてそ正字海

よ摸りし様を様字の誤様亦樸属様
者象与樸為一物とみてそれ是樸誤く
イチヒといふもの属にて李東璧の本草よ
樸有二種一種甚木心赤しといふものを古よせ
クヌギといひ又をイチヰといふもの頌云櫟子クヌギといひ
しき則枚樸の材の字をとめくなひし又一種赤不高二三丈喫実
而至之有斑文點こしといふものを古とトヌナと

といひてもトチといひて家として用ゆる
みすのこれくてはイチヒといひツルハミと
といひトチといふことさにも義並に詳
日本紀に赤檮須々伊知比といふことは
其の義いまだ詳

櫪

カヘ　倭名抄に本草を引て柏実一名櫪子
カヘといふ名はやり倭名抄に樹名カヘといふ

二川櫪也栢之（櫪子のことなり）鈹子
子等の名あまたあれど栢字をかく名は仮名
洋造の俗櫪子とは栢の字を用ひてよく
カヤといひ栢の字を讀む時はもとのことよ
末くカヘといふなれと栢又作栢とも栢に柏
俗字といひぬれば字實もあるなれば
ことなどをこころべきしらるる字を用ゐる

もろこしえてより柏の下ニ詳之（倭名抄ニ引ども不）
此和名本草和名にみえて和名本草ニして柏実を榧子なり
と誤しを啓蒙の方言を叙せし也とみえたり

榧子カヘいひし事ハ詳ならす

胡桃クルミ　倭名抄に七巻食経を引て胡桃読くク
ルミといふクルミは呉桃之呉ハ伏實之呉字より来
るへし果実なるといふて大かた倭名抄ニ見へ
地名に呉桃読てナクルミといふ事も地に見

之○本草綱目に胡桃ハ北土江表亦有之或陰倉者落
皮多肌肉陰平者大而皮肥急捉則碎といふものハ是ヲ鉅
鮮なり其外のことくはしからぬこと又頌表云南方有山
胡桃皮厚而大堅多肉少穰其殻亦厚須椎之方破といふ
ものにてさは殻厚き故すなはちのものにてこゝさへことさらなり
異なる事ありし不疑今いへる山胡桃といふものなるへし
ヲニクルミといふものにてまた一種ヒメクルミといふものあ
是ハ皮薄きものなりとさる

棗

ナツメ倭名抄に和名なつめと訓ず大棗一名美棗
ナツメといふ酸棗一名樲棗サ子フトといへる
棗之中味酸者也と見へたり或人此説よナツメ

又は莪蒿之氣味の中は本のゝ莪よもく
蒿をさしめのといひしといふくサ子とれ
様之介は花し

胡頽子ダミ倭名抄に胡頽子をもりゝ一川に云早り
といふ本朝式用頽也子三字すへてふつ云ロナりと
分頽也之歌中の傍氣多きをいひく云ロと
いふも実に解難きをいふ之々に此篇之

二字或説ニ極熟帯黄なる者之と説しまゝ黄瓜
アヲスウリ斑瓜てタヲフリ黄甂きうりと説せりそ
きうりといふものを胡瓜なすといふ事何説誤
皆胡瓜の熟説人のいひし果瓜之まゝ白
瓜をシロウリ冬瓜はカモウリ胡瓜をソハウリ
俗よりきうりといふ事説也は白瓜を除花家
うりて京の越瓜みく白冬瓜なと白瓜なとし

ふそのまなはかしはそはくとカモウリといふは
カモどは瓜（カモ）也皮上白をもちて瓜此てうる
ゐをいひし胡瓜をソハウリといひしは又絞
あうをいひしきうりともいひしは老
て黄瓜ゐうふとあゆ之漢字は亦一名を
黄瓜ともいひたりし也漢人のいひし
菜瓜之まし家々にて花をとりて食し瓜のかはり

ウリといひしは八の後あのといひくきウリ
ともいひしたゝちを多く多貢なるよりね
之廣ちと亦一名を黄瓜しといひつ此ちた
廣人のいひし華瓜之又萬名苑をみ穴を瓜
たカワウリ至美熟之と瓜しくのたゝ永加
此表瓜季东破而菊ま宿を叙しいひ地多
称しとは丸は又果瓜之かくまあね々を秘生

まことの移ありとて中へ入られしに形勢絶し
楊まこそ実なりといふて八月熟さをまちてさうれ
見たる晩成丸とて紀をやいひめもしてあらし代
稀もやまほうしカツウリといふ名をあまたゝ
く君澤宋雅集頭をしるし維納と文字フウリ
小然光之を得ゆしは危跡よりまふ成実
を木刈山ちうといふ見ゆさるもいつまでも成し

もわれをわよとさかへきまるとは文字つ
ゐりといふへしあよを経わりとはれさ文字
ゐといふ家もきまし二泮　湖瓜ときゝうりといふ或ハ　其奥わかをといふなり
と漢に胡瓜といふなるも此條奥をきといふ本草綱目
と併考へし

栝樓　カラスウリ　倭名抄に兼名苑注をしるく栝樓
一名菰瓠　カラスウリといふよしや延喜式に和
和名抄云栝樓一名天瓜　菰瓠と

尓雅の藈姑一名王瓜也是二物之兼名記
に栝楼一名瓜瓠といひし二物をまじへて一
物となるよし似たり瓜楼をよめるもカラスウ
りと作りしは物一名老鴉瓜といへるよりあり
之天瓜王瓜同しく是等をさしていへる義も
又或似たるし我国の俗名によくカラスウ
りといひしと見へさりしは物と果蓏の

ろはわされし名は中くウリといひぬ
きんころふ派も老孫氏の名婦にあて当頭に
えくく李字登つあ字を王氏
麺くぬきん火京と　綾花含に
あまり此名あうとみえたり

薁

薁山へ薁と毛詩幽風に六月食薁とみえし
ことを漢方では蘡薁一名は燕山蒲萄とも
と耿蒲萄ともいひばかりでは本方ユヒといい
ひ後に山へといひ今は俗にエビ蒲萄とて

又エビとも黒葡萄とも 地葡萄とも山葡
萄ともいふ京にてはかつらといへり古
くエビといひしを作紫式部の黒やら蘡蒲
萄とかけりといへり齋(?)記古事記日本紀
等にて葡萄を蒲萄誤てエビといひし
也と後人説くてよといひしを別画風丸(?)続
蘡薁の字続くムつといひし(ば)倭名抄並疏

故に郁子と截て讀むへしといひ本草は
は郁子一名棣といふを引たりこれを莫郁李
此同しかれは郁李二名常棣といふその注を借
るとて莫李の漢字をかりしとし郁李すれ
すなるに又は果実の名をもちゐて猶れ栽
せる何夢の名をもつて奠ならず疑へ
へなりとことしむへしといふ美よ不学可然

集作は古流に奇意を二しいひしとみえてこヒ
といひこしいふそ俳風之エヒとは奇成奇実
といふたとしまる古流にウメといひしを説ニ
といふといふさしてふといふは正足エヒの俳流
之呉ある名しるてを 自称記に説候らメ也いふ
須ちりまく薩説草のまふ
へとは宜ありて説之と 表草のに 柳孝には
須ちしゑけなり
唐様之ことに花もて万歌集大伴家持縁庵

棣花 和ニハネズと注せり日本紀ニ朱華

此云ハ子ズといへる注せり是之名たり倭名

鈔ニハサクラといへる倭名鈔ニ棣桃注云ニハサ

クラといひ ひとりの名はあまれ 万葉集和ニハ子ズと 見えたる赤色のもの

とて又日本紀ニ注せられ唐棣の花ニ御ニ記す

唐棣の名をハ子ズといひしは違へり

蒲萄 エヒカツラ之倭名鈔ニ蜀都賦注云蒲萄

俗漢語鈔ニエヒカツラノミといへる注せり文の

これは二字の音をよくつタウと唱ふ
つれ世之エヒカツラノことゝいひしを初て燕薁と
はひくエヒといひしは後にはねとよびならひ
てゝを似よりみよりてはねともエヒカツラノこと
といひはみは燕薁をイヌエヒ[illegible]
いひし又倭名抄には葉蔔読てエヒカツラ
といふものはこれ一物也 倭名抄に又しるせ 蔔莫は葉蔔を

本草にいふ和名エヒカツラ文選蜀都賦に蒲萄乱潰と漢
注に蒲萄エヒカツラハことゝいふと注したり本の
本草にいふものは和名本草にみえて考せし所よりさき
蒲萄は今紫葛の実をいふに似たり読者本草を
按ずるに紫葛は一名苗葉或は蒲萄に似たりと
いひ或は蘡薁に似たりといひて別なりこれ一物にあらずされ
いひてエヒといふも元ニツ蘡薁と蒲萄と紫葛なり
然るに和名抄に蘡薁をは都ほと訓して元蔓此に
紫葛也紫葛蒲萄を一物にとり為して蒲萄
を録せられしは誤にして和名抄の例也
名は一ところには葡萄とも併せ注をとし
いふてられたるなり

葡子 尺たし 倭名抄に本草綱 花鏡 湯液経 和名

本草綱目に葡藤一名烏蘞又附通子は
アケビといひ通草はアケヒカツラといふとそ
されとも通附支と云実を燕覆と名
なりのちアケビは赤之ヒとは実之実上
し
木瓜のごとく開て白き熟し如きを
同毒ささといふ
蘡薁子イヌエビ漢名蘡薁 本草時珍穀名を

りく霞文字はイチコ今按霞宜作蓬と作
もり誤寫の和名に據りに蓬藁は霞文字
といふものゝ日本紀に蓬藁はイチコとよ
と須臾乃頃蓬藁穂はイチゴといひて
はしイチコなるイチムコ之ことわざ詳ならね
覆本草和名のうちには五種ありといふ蓬藁をいちご
ヤマイチコといふ是之霞文字をいちごイツルイチコといふ民
之苺はいちごカラシリタチといふこれ之懸鈎子はいちごキイチ
ゴといふはいちご之蛇苺をいちごともヘビイチコといふ是もその中

慈姑子の毛掛しく此を莓と云或人の説にイ
チゴといふとイは覆瓫の訓チゴは血こそれ子にて子赤キ
ヿ血のごとくなる故なりといへどまへき草木の名イチゴと
いふものことごとく苺麻をイチヒといひ櫟子をイチヒといひ
覆盆子をイチゴといふ苺麻櫟子のごとき血色に
似たるのみをいへる也

薢

トコロ 倭名抄に唐韻云萆薢草名苑頂の
黄薢并読てトコロといへり俗用荒字蔓
訓を用此荒字今按不出並未詳と注せり
トコロといふ義は詳ならず野老の借字なり

て芫の字を剣造りて読くトコロといふ字頭
くやトコロといふは之を根鬚多しく老人
の黄鬚あるを見るかごとくなれは耴老の字
を用ゆるは我御雌の長鬚あるかことく御荒
の字を用ひて読くエヒといふかことくなる
或人の説に萆薢をトコロといふは蘼蕪草の根耴老
読くトコロといひ萆薢をもトコロともヲニトコロとも読なり
倭名鈔に陶弘景か狗脊萆薢草薢相似也といひし
是等へみな似たれはなり凡て今倭のトコロといふものの義

和名ニハ萆薢根作塊節黄赤色といふものに似て草細長
面白色にといふものに似たり其反又此草薢の葉みト
コロといふものに似て大きなれハ一トコロ又ハ二トコロとよひ
し名ありと見えたり。故此の條凡萆薢の外へなるを鬼
とよひ又これをとも難といふ萆薢これと紀とその
根塊節をなして黄赤色破横あり見て又これと
トコロといふものに似たりすこし似たれとも條節かわる事
をはらく萆薢をサルトリ一トリまたオハラといふも又これも
これも又トコロといふものなれはおしれトコロといふものは草薢。
萆薢のれおして花あり、これ一あられし若毒獨食絶ま薢
といひく萆薢とはいはれ黄名花はなれて
黄解といひしとえてあり

菱子ヒシ　ひしの名を仁徳天皇の御歌にも

てふえてくれとこそ気れとあれは不祥 古伝に 力とは
ともいひけり 蓮の実猿角かのこれ力に似たれは
はなかりきりてよさしもことといひしを詞ゆへけれ
よくりふたつかり
いひしそえてそうり

蓮子ハチスノミ 俗名称繁蔤を列く芙蓉ゆへ
荷とは玄あはれは藕ハチスノハヒこも茎は茄ハチスノ
多キこも総名は蔤亦作荷こも花を菡萏こも
子は蓮こも中は菂蓮を俚房之的を俚薏

中子蓮子は ハチスノミ ハチスとは 蓮 実之ことを房似 なるをいひしとそ 實之 荷をハチスノハといひ芙蕖菡萏芙蕖といひ いまだ餅なるを 菡萏といふ

俗名 諸果蔬 數々 載せしなり 不悩 廿八日

枇杷とハ 高きとのみ いふなり 字は實を見よ

此ひしるもの 是に 盡すに 及ばれ

已上果蓏